

『ヘンゼルとグレーテル』の共時的解釈

—構造分析とコード分析—

荒 木 正 見

1. 解釈の方法

小論はグリム童話『ヘンゼルとグレーテル (KHM15) ⁽¹⁾』の共時的解釈⁽²⁾を試みるものである。

・解釈の方法は次のように設定される。

まず、解釈の方法はテキストそのものから導かれなければならない。ヘーゲルは哲学的考察の対象としての絶対者（絶対的实在）を認識する際、絶対者を手に入れる道具や媒体についてあれこれ考えることは無意味であると述べる⁽³⁾が、絶対者に限らずあらゆる対象は解釈者の先入見によって歪められることなくあるがままの姿で解釈されなければならない。

しかし、すべての解釈対象は象徴的存在として無限の解釈可能性を持ち⁽⁴⁾、また解釈とはテキストAを別の表現Bへと置き換える作業である⁽⁵⁾以上、特殊な存在としての解釈者の介入を阻止することは困難であるように思われる。共時的解釈とは要するに「いまそこにある」テキストの意味を読みとることであるから、真に本質的な意味を瞬時にして直観する（フッセルの本質直観⁽⁶⁾）ことが理想であるには違いない。しかし、それを文字通りに遂行することは特殊な存在としての解釈者には無理であろう。そこで我々解釈者はテキストそのものから出発する仕方を次のように具体化する。

まず、ただひとつの例外、絶対者を除いて、すべてのテキストはテキストとしての規定を持つ。そこで、テキストそのものから出発するためには、当のテキストの規定を分析することから始めればよいのである⁽⁷⁾。

ブレモンは物語の記号学研究 (L'étude semiologique du récit) を二つの分野に分ける。そのひとつは語りの技術の分析 (l'analyse des techniques de narration) であり、他のひとつは語られる世界を支配している法則の探

求 (la recherche des lois qui régissent l'univers raconté) である。そしてこの法則は次の二つの起源を持つものとされる。そのひとつは「論理的拘束 (contrainte)」、すなわち物語が成立する環境としての文化、時代、文学ジャンル、語り手、その物語そのものの文体、といった特殊な事情である⁸⁾。

予備考察的に述べれば、『ヘンゼルとグレーテル』は、その規定的特徴から分析の軸を前提的論理にむけるべきである。なぜなら、『ヘンゼルとグレーテル』は、成立事情を考えれば童話とはいえ、本来民話を採取したものであるし、また後に考察するように論理的整合性が極めて高いという点に於て口伝えされていくうちに共同主観によって普遍化された程度が高く、成立環境の特殊性の影響が少いと思われるからである。また、語りの技術については本来口承されたものが記述されたという点で決定的な考察の不充分さを予測させる。しかし、記述されたテキストという意味でも、語りの技術を考察すべきことだけは予定しておかねばならない。

ところで、前提的論理はとりあえず広く理解しておかねばならない。

ブレモンは論理的展開の基本単位を機能 (fonction) とする。機能とは物語の全体のテーマを構成する概念である。そして、三つの機能の集りが基本的連続、即ち、過程の可能性を開く (ouvrir la possibilité du processus) 機能—それらの潜在性を実現する (réaliser cette virtualité) 機能—その過程を閉じる (clôre le processus) 機能、を形成する。更にブレモンは、この基本的連続が阻害や失敗によって途切れる可能性や、基本的連続同士が網の目のように結びついていく様々な仕方を指摘し、それらが具体的なテーマ構成をどう表現しているのか、などについて述べる⁹⁾。

このようなブレモンの立場は、基本的構造を前提として考察を進めるといって構造分析の立場に立つものであるといえる。こういった基本構造は例えばジェイスンのいう、時間的移行、空間的移行、という時間や空間、プロットの魔法昔話における定式、というように様々に挙げることができる¹⁰⁾。たしかに紛れもなくテキストに存在する構造を手懸りにして分析を遂行することは、直観や印象にのみ頼る解釈に比べてはるかに見落しが多く正確さが増す。しかしまた多くの場合、わかりきったことまで改めて前提的構造の網をかぶせなければならず、煩瑣にわたることは否めない¹¹⁾。

さて、前提的論理は構造に限らない。フロイト、ユング等における事柄のシンボリック意味、ロラン・バルト等におけるコード理論に基づく分析のよう

に、事柄の意味そのものについての前提的知識を駆使する分析も、前提的論理に基づく方法の一つである²²。しかし、症例から帰納的に得られたフロイトのシンボリックな考察にしても、神話や民話から引き出されたユングの元型にしても、ロラン・バルトのようなテキストに潜在するコード（暗号解読の為の乱数表）の探究にしても、象徴的素材を対象とするのであるから、解読可能性は無限にあるので偶然性が入り込む隙が大きいと言わねばならない。

では、いかなる前提的論理が必要なのか。一般的には、テキストが方法を規定するのであるから、前提的論理も上記の構造的考察と素材的考察との両極を組み合わせる選択していかねばならないであろう。では、『ヘンゼルとグレーテル』の場合はどうなのか。それはむしろ、分析そのものの過程で明らかにされるべきである。

2. 『ヘンゼルとグレーテル』の分析

前節で述べた考慮すべき両極のうちの普遍的な極、構造について分析を開始する。

構造的な面で最も顕著なものは空間移行、すなわち場面転換である。場面は①木こりの家（森の入口）、②森、③魔女の家（森の奥）の三つに分けられる。このように見ると、場面を貫くコードは森であることがわかる。森は、シンボル辞典²³によれば、女性的原理やグレートマザーという意味や、束縛や文明化からの自由という意味を持つ。森というコードは後に他の象徴的事柄との連関のなかで考察する。

ここで、純粋な構造分析ならば他の構造についてすべてチェックすべきであろうが、このテキストには空間に匹敵する強力な構造は見当たらない。勿論、機能は必ず表現されているわけだし、言語学的な修辞構造などが存在することも当然のことである。しかしこのテキストの場合、以下に述べるように登場者の行動のなかでコードを発見していくのが最も取りかかり易いと言える。もし考察の過程で矛盾やアポリアに到達すれば、改めて新たな構造を分析対象に取り上げればよい。この方法も、前提的論理の連関を手探りするひとつの仕方である。

さて、われわれはこのテキストを貫くコードを発見することから開始しなければならない。空間的構造から得られたひとつのコードは森であった。次にストーリーの展開でコードを予測するならば、それはストーリーの開始に

あるといえる。ストーリーはどのようにして開始されるのか。それは一般的に、ホメオスタシス（平衡状態）の崩壊によって開始されるといえる。つまり、それまでの持続的状态に変化の兆が現われるその瞬間である。プロップや、その流れに沿うジェイソン、ブレモン、等の物語分析者によって動機（motif）と呼ばれるその瞬間の内容には、その後の展開のすべてがすでに内包されているのである。

このテキストで変化の兆、すなわちきっかけはまず母親（継母）が子供を捨てる相談を夫にもちかけることに現れる。それは饑饉になったので4人であるよりは2人である方が生き延びられるという計算に基くものであった。次にもうひとつの変化の兆に注目しなければならない。それはこの話の主人公、ヘンゼルとグレーテルがその大人達の会話をこっそり盗み聞きするという点に現れる。この二つのことは同時進行の形で行われるし、共通するコードを考えれば、同じひとつのことを意味しているといえる。そのコードとは、子供が成長し母親から自立することである。（昔話の継母は多くの場合、古い形をたどってみると実母になっているように、継母であることは重要ではない¹⁴。）

次に、この母親からの成長的自立というコードが、登場人物を通して機能的に語られていく様子を考察しなければならない。この場合、考察の中心は人物や登場者よりはむしろ機能にあるのだから、複数の登場者が同じ機能や同じ象徴的意味を構成することを念頭に置かねばならない。

ヘンゼルとグレーテル。彼等は男女一対になって行動するので、我々が自らを意識している中心、自我を意味するとみてよい。彼等の行動はほとんどの場合、兄のヘンゼルによってリードされる。捨てられるはずの森で迷わないように小石を撒き、迷えば先に立って道を探し、捕えられれば機知を働かせて魔女に食べられないようにする。このような行動は、人格を形造る性格のうち論理性もしくは意識性の強い知恵と冷静さを意味する。それはまたユング心理学でいうアニムス性すなわち男性的側面の重要な性格でもある。しかし、それにも限界がある。まず、道しるべのつもりで撒いたパン屑を鳥に食べられることによって破られ、そして最後には魔女の激しい本能的食欲、すなわち情念によって兄妹は危機に陥る。この最も危険な場面に至ってはじめて妹のグレーテルが行動を起す。それも、魔女を焼き殺すという、兄の冷静さとは反対の激しい情念をむきだしにした行動である。このように、グレー

テルは人格を形造る性格のもう一面、無意識的傾向の強い情念、アニマ性つまり女性的側面の重要な性格を持っているといえる。

継母と森の魔女。この二人はいずれも兄妹が森で迷っている間に（おそらくは同時に）死んでしまうように、機能的には同一の存在であるといえる。この二人の行動や性格を列記すると次のようになる。1. 子供を捨ててまで生きようとする。2. 4人より2人の方が生きられるという計算をする。3. 甘いもので子供を誘惑する。4. 目がよく見えない。5. 子供を食べようとする。6. 理性がなく情念で行動しようとする。以上の行動や性格は次のように意味づけられる。1. 利己的で、2. 情のないうわべだけの計算をし、3. 表面は優しくふるまい、4. 物事の本質をわきまえず、5. 子供を所有物だと看なして覆いこみ、6. 感情によってのみ動かされる。このように考えれば、この二人は悪い母親を典型的に表現しているといえる。この悪い母親に徹底的に欠如しているのは、子供に対して心からの愛情を持ち、育み、巣立たせてやるという理想的母親像である。

父親。話の発端が悪しき母親にあるので、父親はそれとは裏腹に、沈着毅然とした理想像とは程遠い、気弱で妻の言いなりになる男性像とされる。更に男性としての役割を機能的に持つように、木こりという、男性としての最も基本的な性格が与えられている。

鳥。この話で鳥はきわめて重要な役を果たす。1. 兄妹が家に帰れなくなる際に、道しるべのパンをついばんでしまう鳥たち。2. 兄妹を魔女の家に導く白い鳥。3. 兄妹をもとの家に導く白いカモ。鳥はシンボル辞典⁴⁰によれば、その姿から直接連想される空気、風、魂といった意味の他に、神の本質とか神の使徒という意味がある。上の三度の鳥の行動も、このような神の使い、言いかえれば生きるための原理や法則を意味していると見れば説明がつく。1. 2. は兄妹にとっては害を為す行為であるように思われるが、神、言いかえれば生きるための原理や法則は、教師や親に叱られる時のように、本人にとっては一時的に辛い印象を持つこともある。そして、この1. ~3. はいずれも、この話の中心的コード、母親からの成長的自立を推進するように機能しているのである。

このように以上の登場人物や登場者はいずれも母親からの成長的自立というコードを浮び上らせるように機能しているといえる。原理的な側からいえば鳥たちは兄妹たちを森へと連れていき、森の最深奥に導き、兄妹が最悪で

あり最も危険な母親像を滅したら一転してもとの家に導くという働きをするのである。また、ヘンゼルとグレーテルは、我々自身の自我として、現実の母親から離れ、未成熟ゆえに、知恵を使いつつもより危険な母親像へと接近し、そこで最も危険な状態に陥り、魂の一番深い情念を發揮して、子供を食べつくす母親という母親の最も原始的な姿を乗り越えることによって、もとの家に帰るという経過を辿る。従って母親の方も、ただ単に計算高く愛情の薄い母親から、むしろ積極的に子を食べてくそうとする母親へと変身し、結局いずれもが、子供の成長とともに死んでしまうのである。父親については上に述べた通りである。

さて、このように母親からの成長的自立というコードは登場人物によって機能的論理的に構成されているわけだが、それに、分析の冒頭で述べた森のコードはどのように関わっているだろうか。

先に、森は、女性的原理や原初的母（グレートマザー）の意味があることを述べた。とすると、ヘンゼルとグレーテルは、現実の母からより深い母へ迷いこみ、結局は母に抱かれていること（森の中）の危険を知り、それを自らの魂で打ち破って現実の母からの自立を獲得したということになる。

また森は、現象学的に考えればこの話の語り手^④にとっての基本的場面である。すなわち、この話全体は語り手の意識に立ち現われた現象であるが、森の入口→森→森の奥と入っていくストーリーの進行は語り手にとって、意識から無意識へと認識を深める、言いかえれば、無意識の内容を徐々に意識化していく過程に他ならない。とすれば、森の入口の木こりの家は現実生活であり、森の奥の魔女の家は無意識の最深奥である。そして、最も実りある成長とは無意識の最深奥まで経験し、変化することである。兄妹すなわち自我は現実の母親から離れ、無意識もしくは原初的母親の世界へと迷い込む危険に対して、はじめにはヘンゼルがするように現実の日常生活と同様論理的意識的要因の強い対処の仕方をする。それ自体成長することでもあるが、より決定的な自立成長を遂げる為には最も奥深い原初的な母親との対決が必要になる。その場面ではもはや、これまでの対処の仕方は通用しない。グレーテルがそうしたように情念と情念の激しい対決が必要になる。そこで得た勝利こそが、魔女の家の宝である。この話のなかで、兄妹が魔女の家で宝を見つけ、それを森の外の自分たちの家に持ってきて幸せを得るとするのはまさにそのような成長を意味する。

かくしてひとまず『ヘンゼルとグレーテル』の分析を終える。

3. 結び

以上の分析を顧て方法論的に幾つかの点を指摘しておかねばならない。

まず、テキストそのものから分析の方法を導きつつ進行していくということであったが、実際にはどのような方法がとられたのか。

はじめに、二つの面から分析の手懸りを得た。ひとつは普遍的な方法としての空間分析であり、他のひとつはいささか直観的ではありながら、ホメオスタシスの崩壊という、ストーリーの展開の普遍的構造には欠くことのできない重要な概念を用いた、きっかけの発見であった。そしていずれの面からも重要なコードが得られた。次に、きっかけによって開始されるストーリー展開のなかで、それぞれの登場人物や登場者が果たす機能的役割を考察し、きっかけで予測されたコードが構成されている様子を確認した。更にそのコードと、森のコードとがどのように関わっているかを考察した。

このように分析は、構造分析的な面を手懸りとしてコードを発見し、その後コード分析をシンボルの解釈を論理的に結び合わせていくという仕方で行ったわけである。そしてそのすべては1節で述べたように、前提的論理を発見し分析していくという意図のもとに為されたのである。

以上の方法は、『ヘンゼルとグレーテル』に於てのみとることができたという特殊性については念頭に置かねばならない。個々の分析方法は変わらないとしても、それらがどう組み合わせられるかということは当のテキストが決定することだからである。

また小論は紙数の関係で共時的解釈に限定したが、通時的解釈、すなわち、テキストそのものの成立事情、作者の伝記的要因、等々に基づく解釈が、このような共時的解釈の根底を為すことは言うまでもない。

(1984. 1)

(註)

- (1) Jacob u. Wilhelm Grimm: “Kinder-und Hausmärchen”
- (2) 拙論『共時的解釈の構造』（梅光女学院大学『論集』第15号所収）参照。
- (3) G.W.F.Hegel: “Phänomenologie des Geistes, “Einleitung, PhB 版 S.63
- (4) 拙論『「記号」と「象徴」』（梅光女学院大学『論集』第13号所収）参照。
- (5) 註(2)拙論参照。
- (6) 拙論『構造分析と「機能」』（梅光女学院大学『論集』第16号所収）参照。
- (7) ただひとつの例外、絶対者を対象とする解釈の方法論について筆者は、ヘーゲル『精神現象学』の方法論として次の論文で述べた。『経験する意識の構造』（『理想』1983年10月号）
- (8) Claude Bremond: “La logique des possibles narratifs”, (“Communicatons” 第8号, 1966年, 所収)
- (9) ibid.
- (10) 註(2)拙論参照。
- (11) 筆者はこのような構造分析の作業を次の論文で行った。『異常な語りーカフカ「変身」の構造分析ー』（梅光女学院大学公開講座論集第11集「語りとは何か」所収）
- (12) 註(6)拙論参照。
- (13) J.E.Cirlot: “A Dictionary of Symbols”, 英訳は Jack Sage による。
- (14) 河合隼雄: 『昔話の深層』、なお小論は本書に示唆されるところが大きい。
- (15) Ad de Vries: “Dictionary of Symbols and Imagery”
- (16) 本来不特定多数の語り手が存在するが、ここでは便宜上このように表記する。